



101号  
2005/3/1

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://users.hoops.ne.jp/wanli-jp/>

Eメール: [wanli@m2.ocv.ne.jp](mailto:wanli@m2.ocv.ne.jp)

ホームページは毎月5日頃までに更新を務めています。



お正月はモン族の子供たちにとって一年で一番嬉しい時。タイ、バンピナイ難民キャンプ。 安井清子氏撮影

### 'わんりい' 101号の主な目次

中国紹介<17福建省・土楼3>.....	3
「康定情歌の旅」①.....	4
東チベット周遊PHOTO TREK(写真撮影の旅)②.....	6
日本に留学して思うこと 災害と平和と.....	8
何媛嬢来信⑫「鶏の話」.....	9
ネパールスタディツアー⑥.....	9
ピースボート105日間の旅 I <船内生活>.....	10
モン族の図書館、遊び小屋、集会所のようなみんなの家.....	11
中国を読む⑫「谷崎潤一郎 上海交遊記」.....	12
「わんりい」新年会」報告.....	12
「わんりい」掲示板.....	13

### お陰さまで 'わんりい' は第2世紀に入りました!

特別な編集方針もなく纏めていますので、一号、一号はまるで文化のかげらの寄せ集めのようなかもしれません。しかし、号を重ねて見えてくるのは民族を超えた人々の何か共通な祈りと願いです。

今後とも、ご鞭撻ご指導とご協力をお願いいたします。

( 'わんりい' 編集責任者: 田井)

♪♪ 笑顔が美しくなる ♪♪

### 「中国語で歌おう会」 会員募集中!

明るく楽しい中国人歌手・趙鳳英さんと歌いましょう!



3月の講座 3月18日(金)

19:00 ~ 20:45

麻生市民館・視聴覚室(新百合ヶ丘駅北口3分)

●3月の練習曲「旅愁」

原曲は米国ですが、本家の米国より日本で愛唱されている。面白いことに、中国でもよく歌われており、中国の歌と思っている人も多いそうである。

指導: 趙鳳英さん(中国四川省出身歌手)

体験参加歓迎! ご自由にご参加ください!!

体験参加費: 1500円

ご参加される方は録音機をお持ちください。

問合せは、'わんりい' 事務局へどうぞ

初めて土楼を見たのが2002年秋でした。秋といえば、東京ではそろそろ寒さを感じるころです。上着も秋冬ものに替えようかという時期でしょう。中国大陸東南部の福建省は、亜熱帯気候のため秋という季節はほとんど夏も同じようなものです。すごしやすい上に空気が澄んでいて、天気の良い日は遠景がよく見えました。陽光降り注ぐ、といった印象です。

土楼、特に円楼は青い空と緑の山に囲まれて生えている巨大なきのこです。人間の目から見ると巨大なきのこですが、宇宙から見ると小さな菌類に見えるでしょう。黒い屋根根と茶黄色の土壁は、自然の風景とも合っているように感じてしまうのが不思議です。

土楼にとりつかれたわたしは、また行きたくくなりました。無数にある土楼を全部見ようというわけではありません。でも、形はいろいろあることを見聞きしたので更にきわめたくりました。幸い大好きなアモイにも行けるし、都市と田舎を両方体験するのも面白いものです。初回はツアーに参加したので、本当に有名な土楼については一応見たこととなります。しかしそれだけではとても満足できないので、地域のもっとマイナーな土楼をも見たいと思いました。しかしツアーでは行くところが限られているので、希望を出すこともできません。そこで二度目はアモイのフリーツアーで行き、時間をみつけて土楼に行くという方法を試みました。それなら都合をつけて行けるときに行ける場所を考えられると思ったのです。

とはいえ、福建省から広東省、または江西省までも点在分布しており、しかもその大半の所在は山奥というか道路も未整備な土地にあるので、片っ端からというわけにはいきません。前回は切手で有名になり、おそらく国内では知名度が高い大型の円型土楼で高頭村にある承啓楼を見たので、その近くにあるもう一つ有名な振成楼とその周辺を目標に考えました。日本のツアーでは、これら大型土楼よりは



のどかな風景。漳州から土楼方面に向かう車窓より。川向こうにはバナナ畑が。

アモイから近い小型土楼を見るのが多いのですが、どうせなら歴史の長いものを見たいと思ったのです。

大型土楼のある永定までは、アモイから近郊バスが出ています。しかし出発時間も限られている上に観光バスではないので、短期旅行者には向かないと思います。手取り早いのが車をチャーターして直接土楼まで行くことです。土楼は山奥に点在しており、道もよくないので大型車で行くのも不便です。「全身マッサージ」になるほどの悪路はここ数年で減りましたが、ないとはいえません。山道なのでカーブの連続になり、対向車がいきなり現われることもあり、スリルがあります。電灯もないので夜は真っ暗になるので車で通行するのも危ないといえます。朝早くにアモイ市内を出て午後しばらくしてから戻り、夕方5時頃にアモイに着くというのが標準のようです。

泊まっていたホテルで車を紹介してもらいました。ホテルで直接頼むととても高く高いので、人を介して別の車を呼んでもらいました。もちろん運転手はその地域に何回も行ったことがある人です。そこに同じツアーの人を誘って3人で乗っていくことにしました。車はきれいで広くてゆったりしています。多少の悪路は問題なさそうです。朝7時半頃アモイを出発しました。アモイ島から、近年開通した海滄大橋<sup>そう</sup>を通して西南部へ向かいます。アモイ市はアモイ島とコロンス島以外にも広がっており開発中の広い土地に工場や住宅があるのが見えますが、いずれも新しいのがわかります。工場などの開発区をぬけると完全に郊外となり、畑が広がります。その頃になるときれいに舗装されていたアスファルト道路がいきなりほどほどの舗装状態になり、急に車の揺れを感じるようになります。それは地域の境界線を越えたからで、アモイ市でなくなると道が悪くなるのです。



南靖の比較的小規模な土楼内部。広場があり周囲を見渡せる。

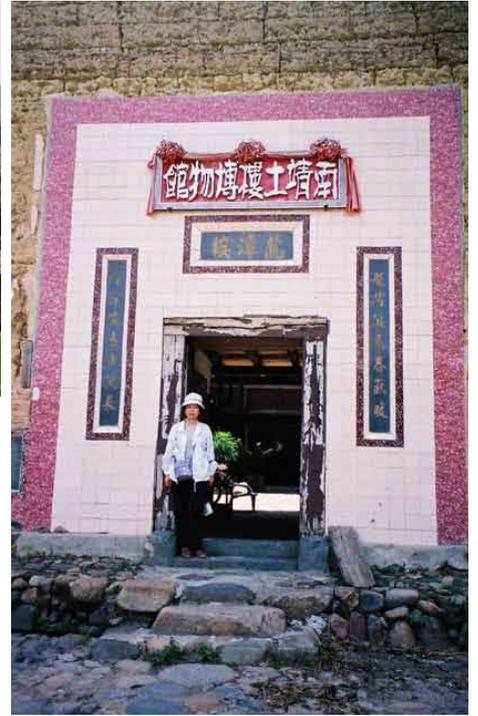
アモイ市の隣は、漳州市という町です。ここは花卉が有名なようで、ツアーなら「百花村」というところに行ったことがある人もいでしょう。園芸用に使う草花がたくさん展示してあります。残念ながら外



車窓より。住居の形は大体同じだが、よく見ると方楼や円楼が山のふもとに多いかもしれない。

国人は持ち帰れないので見るだけですが、好きな人なら楽しめるでしょう。また、バナナも有名で車窓から見える風景は一面のバナナ畑であることが多いです。ちょっとした斜面もすべてバナナ。実の部分には青いビニールがかぶせてあるので、実を見るのは難しいですがバナナの木の大群を見るのが初めてだとかなり驚きます。日本でよくある「台湾バナナ」というブランドは、実はこの地方のバナナであることも多いとか。地域的には似たようなところなので、特に問題はないでしょう。バナナが大量にとれるほど温暖で水も多いのでしょ。高速道路の停留所近くでは、通過する車をねらってバナナ売りがやってきます。大きな房で丸ごと売ってきますが日本に比べれば安いものです。お菓子がわりにずっと食べても食べきれないくらいあります。

漳州は中国でも普通の中級都市です。そこをさらに抜けると今度は街というよりは田舎の風景が広がってきます。川が流れ、周囲は山と畑になり、マンション系がなくなり平屋になり、動物(牛や馬)が歩き、道が狭くぼぼこ道でカーブになってきます。これが土楼の分布する龍岩市です。山道を少しづつ登っていき、所々で集落があり、それ以外は自然な風景が広がります。そして視界に方楼(四角形の土楼)を含む住居が見えてくると、なんだかわくわくしてきます。数からいけば方楼が圧倒的に多いので、円楼を見ることができるのは更に奥まで行かなければなりません。小型楼の多い南靖県には「土楼博物館」になっている方楼があります。住人はほとんど台湾に移住したそうで、各部屋に民俗を紹介した展示室があります。農業器具、服飾、家具、家系図、歴史的著名人から土楼建築方法、分布図、習俗(祭祀)など福建省西南部の人々の暮らしがわかるような展示になっています。1階や中庭にはお茶を飲む場所や売店があったり、ガイドもいます。実際の土楼建物自体も博物館の一部になっているので、部屋の印象もわかります。外壁は土ですが、内部は木でできているので床はぎしぎし音がします。飛び跳ねると下の階だけでなく隣にも影響がありそうです。やはり窓が小さいのと南面しているわけではないので、室内は湿気が多い印象です。でも建物そのものは、集合住宅なので日本でいえばアパート



南靖の土楼博物館龍潭樓。住人はほとんど台湾へ移住した。一部を博物館として改装展示している。

といったところでしょうか。2階以上は部屋だけなので水まわりは何もありません。そのあたりは不便です。家畜などは楼外に場所を設けているようです。

こういった博物館を兼ねた土楼を見ると、昔はこんな生活をしてたのかというイメージがわきます。農業で自給自足に近い生活をしている人々にとって、一族とはいえ大きな住居を建てることは簡単ではなかったでしょう。特に山奥は交通が不便でもあり、山賊が多かったようで略奪や火事で建物が欠けたこともあったようです。1・2階には外側に窓がまったくなく、ベランダを設置するような、本来光が当たる場所には小さな窓しかないつくりはやはり要塞です。最近では集団生活をやめて、土楼の周囲に戸建てにして住んだりすることも多いようですが、唐の時代が最も古いそうですが何百年もそこに住んできた人々もいるというのは興味深いことです。車で走っていても、あちこちに「○○楼」と名称を見ることができます。門の扉があいていれば突然訪問しても、楼の中に入ることもできます。門を入ってすぐが広場になっている場合は、物が置かれていたり家畜(主に鳥系)が走り回っていたりして、あちこちから食べ物のおいが漂ってきて生活感を感じることができます。

そんな土楼をいくつも通過していくと、いつのまにか南靖県を通り越して永定県に入り承啓楼に次いで有名な振成楼を含むいくつかの楼のある湖坑<sup>フーカン</sup>地域に着きます。ここは村で「湖坑客家土楼民俗村」として有名な楼を観光客向けに整備して開放しています。アモイから湖坑までは4時間以上かかります。朝出ても昼前後に着く上道が悪いので到着するとほっとするものです。ちなみに、承啓楼のある高頭村までは湖坑村から車で20分程度なのでとても近いといえます。(続)

## ■今は康定、昔は打箭炉(ダルツェンド)

2004年末から、2005年正月にかけて、四川省甘孜州「康定」へ、当地で育ったウリさん(本誌に随時執筆)の案内で訪れた。同行者は10人、いずれも個性的な人で楽しく旅ができた。康定は四川省の省都成都から西へ約350km離れた、チベットへの入り口にある山間の街で、都市部の人口は約3万4千人。「康定」は旧称、打箭炉(ダルツェンド)と呼んだ。私が以前読んだ、翻訳物の旅行記や登山記には、「打箭炉」として紹介され、四川省の成都とチベットとを結ぶ交通の要衝で、交易で発展した商業都市だ。

「康定情歌」の“カンディ”だよ」と旅行前にウリさんにいわれたが、「康定情歌」という歌は知らなかった。中国人なら誰もが知っている作者不詳の民歌(フォークソング)とのこと。康定へ行くことが決定してからこの曲をインターネットで探しあて、聞き込んだ。パソコン経由でいろいろな曲を中国語版インターネットから取り込んで聴くことができる。日本著作権協会は、苦々しく思っていることであろう。試しに“日本国歌”で検索してみたら、幾つか当たった。各国の国歌の一つとして、あるのだろう。鳴らしてみると、間違いなく「君が代」だった。中国経由で「君

が代」を聞けるとは思わなかった。

さて、「康定情歌」であるが、歌い手の違うものがある。歌詞の意味は分からなかったが、旅行前にメロディーは覚えてしまった。

## ■高山病? と脂負け?

成都で一泊し2004年12月30日、専用バスで出発。この日は、山岳展望の目的で新都橋(地名)というところまで行った。そこは康定より、約76km先にある。したがって康定の街は止まらず、通過となった。新都橋へ行く途中には4000mを越える折多山(中国では峠も山という)という峠を越えるので景色は雄大だ。道々、車中からの展望を楽しんだり、随所で下車して写真を撮った。たどり着いた宿泊地の新都橋は標高約3200m、高原状のさわやかな土地であった。

すでに夕方なので、宿そばの食堂に行き夕食をとると、おきまりの白酒が出た。私は、飲むと危ないと思いながらも、少々飲んでしまった。高地でアルコールは御法度であるが、目の前に液体を注がれるとつい手が出てしまう。

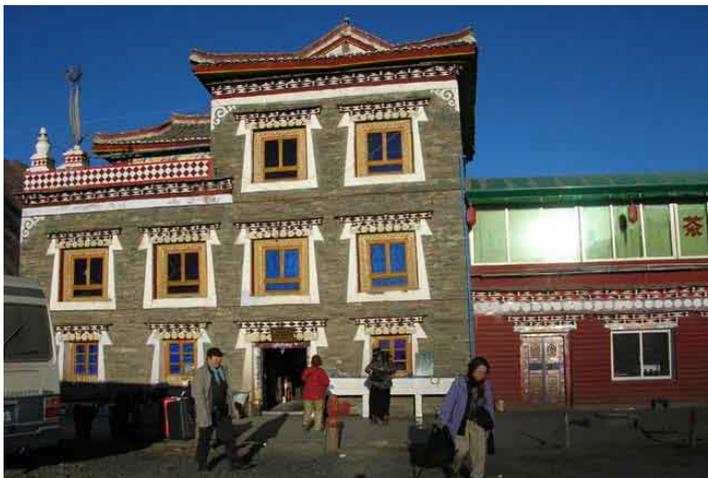
食事を終えてからチベット風の作りの、宿に戻った。そして、まもなく頭痛が始まった。両眼の裏側が痛い。二日酔いなのか、高山病症状なのか判断が付きませんが、動作が緩慢、呼吸は苦しくなかったが体調不良だ。さほど飲んでいないが、客室の構造はいわゆるドミトリイというか大部屋。女性と男性に分かれたが、私は3階に小部屋を見つけて使った。

夜の団らんで私のほか、何人か調子が悪く、胸苦しさを訴えた。道中で買い求めたボンベの酸素を吸う人もいた。それでも私はなんとか寝ることはできたが、朝になっても食欲がなかった。

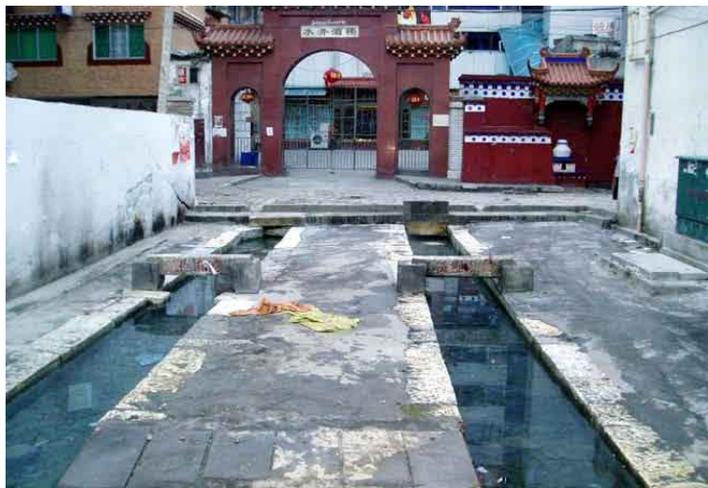
連日の脂っこい料理、辛味に負けてしまったらしい。幸い食欲が無いのと、軽い下痢のほかは、特に具合の悪いところもなかったの、旅行には差し支えなかった。

明けて12月31日は、さらに西へ行って高爾寺山(峠4421m)までお手軽にバスで乗り付け、ミニヤコンカ(7556m)を遠望。夏に訪れると雲が多くて遠望を得るのは難しく、多くの善行を積み、強運が無いと見えない。しかし冬ならば、普通の善行と、並の運で展望を得ることができるそう。見た目の距離感としては、大菩薩連山から、北岳を含む白根三山を見るふうである。しかし北岳と違い、先様は凜とした先鋒で空を突き、さすが7500m級の山だ。峠の周囲は冬枯れした丘陵が連なり、今は動物がいない寂しい放牧地になっていた。日陰には残雪がこびり付き、厳しいチベットの生活環境をかいま見る思をした。

往路で峠を徒歩で越えるチベットの風貌の現地人が、



新都橋で泊まった宿、のチベット式民宿の「藏家音馨旅店」



康定の湧水。突き当たりは「水井酒店」という旅館があった

我々のバスに向かってヒッチハイクを訴えたが、バスは峠から戻ってしまうので乗せてあげるわけにいかず、せつなかった。

### ■印象的な雅拉神山

高爾寺山をあとにしてつぎは、「塔公草原」へ立ち寄った。小川に沿って進むと、景色はやがて高原状に広がり、続いて建物が見えてきた。長い峠を巡らした中に、大きくて立派なチベット寺院群が建っている。寺から少し離れたところには、門前町ともいべき集落があったが、西部劇の町のように草原から、突然始まり、突然終わってしまう。背後の丘はタルチョでにぎにぎしく、飾られていた。

寺院の後ろは広々とした、草原と山波が続いていた。手前の丘陵には、ごま粒のように点々と、ヤクが枯草をはんでいた。徒歩のチベット人女性が2人、背かごをしょって忽然と現れ、岸边が凍っている小川を、巧みに杖をついて渡渉した。靴はぬれてしまったが、彼女らは全然気にしないようだった。

遙か山波から頭を出している、雅拉神山(5820m)が印象的であった。「山」という字が象形文字であった頃の「山」の字ようだと、ウリさんがいっていた。肩を張ったような、個性的な山形は忘れがたい。

### ■康定の街とホテル

夕方に康定の街に着いた。泊まるホテルは川べり建つ7～8階建てのカラカル飯店。街は谷川が作った谷間に展開している。日本でいえば山峡の温泉町のような地形だ。実際、近郊に温泉プール、ホテル、湯治場を併せ持つ「二道橋温泉」という施設があり、カラカル飯店と同じ系列会社が運営している。日本であれば源泉を枝分けして、何軒もの温泉旅館が川辺に建ち並ぶだろう。

街を分断している川は折多川という。かなりの急流で、水音高く豪快に流れていた。水際は護岸され、いわゆる三面護岸、両岸はすぐ道路で車や人が行き交う。流水は見た目にはきれいな水だ。この川は30kmほど下流で長江の大支流、大渡河にそそいでいる。

康定の街並みは、現代中国風の積み木のように味気ないコンクリート造りが多い。それでも、看板や窓枠などに、チベット風の色彩と意匠があり、郷土色を出していた。それとは別に、川沿いにすこしだが古い街並みが残っていて、味わいがある。見かけない建築様式で木造、瓦葺きだ。漢人が作ったものか。近在には木材にするような樹林は無かったが、昔は植生が豊かだったのだらうと思った。私がウリさんに

「これは貧乏人の家か」といったところ、

「そういう言い方はよくない」

と、たしなめられた。彼のいうとおりである。「旧市街」の簡単な言い方が思い浮かばなかったの、つい貧乏人の家と



塔公草原から観た雅拉神山(5820m)、「山」の字のようだ



康定の旧市街、小規模の飲食店や手仕事の店が並ぶ。

品のない言い方をしてしまった。

夕暮れになり、地元の料理店で夕食となる。大晦日ということもあり、これと思うような飲食店は、家族連れや、若者のグループで、どこも賑わって満席だった。私たち約10人はウリさんの先導で、店のあかりにひかれて、一軒のレストランに入った。私は相変わらず食欲がない。康定の標高は2600mとのことなので、高山病的症状はなくなったが、食べる気持ちにならないのだ。今思うとおもしろいような料理を、そのときは、少量だけおそろおそろつまむだけにした。

ホテルに戻り、バスルームを覗くと、シャワーだけで浴槽はなかったが、使用中に冷水にならなければ、これで十分。鏡の前に、立派な装丁のホテル案内があり、何気なく表紙名を見た。すると「人民賓館」となっているの、はて名前が違うと思った。中はこのホテルの案内なのに……どうやらホテルの改名をしたが、備品までは手が回らなかったらしく、古いままですましてしまったのだ。このあたりはいくらか中国らしい。細かいことにはこだわらないのだ。

割り当てられた部屋は、折多川に面した7階だったが、同室人がどこからともなくシャーッという音がする、といった。何の騒音かと思っていぶかしく思い、窓を開けて音源を探したところ、はるか窓の下を流れる折多川が川底をはむ、「せせらぎ」の音であった。日本旅館では風流音に聞こえるのに、中国の飯店だと騒音に聞こえるのは、私の偏見か？

四川省や雲南省とチベットの境界を流れる金沙江を渡ると狭い範囲に険しい山々がひしめき合い、その間をぬって深い谷間に四つの大河が流れている。即ち、メコン川、怒江、イワラジ川とツアンボ川及びその支流である。この地方は、その地形上から地球の皺ともいわれ、そこに占める横断山脈と呼ばれる山域には6,000から7,000米の数多の未踏峰が存在する。

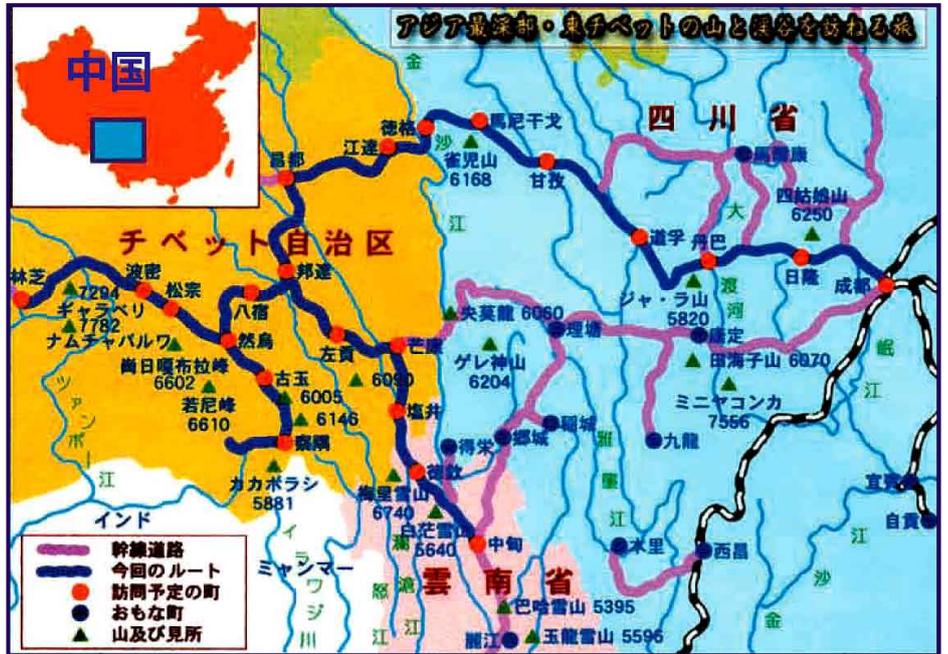
休養たっぷりの昌都を後に、深い谷間に点在する豊かそうな棚田に囲まれ部落を見て進むうちに、やがて4,572米の浪拉峠だ。地図上、目の前に展開する岩峰群の名前は定かでない勝手に推定しながら広大な草原に下りると草原の中を一直線にすばらしい道路が山の彼方へ続いている。この舗装路は次の町まで伸びており、空港建設時に作られたようだ。この道の時速100キロで走っていると、路端で五体投地をしている人がいるではないか。危ない危ない。いったい何日かけて目的地に着くつもりだろう。信心は人に途方も無い勇気を与えるものだ。

おそらく世界で一番標高の高いであろうと思われる昌都/邦達空港には、成都から我々の許可書を持って飛んできた旅行会社の社長が待っていた。彼はいきなり4000

米に降り立ったため気の毒に高山病にやられた様子。

雲南への分岐点、邦達を素通り、業拉峠(4,618米)に達すると舗装道路はこれまで。再び70数個のヘアピンカーブが続くがたがた道になり、怒江まで2,000米をいっきに下らされる。怒江を対岸に渡る恵通橋は川の中央にある大岩のなかをくり抜いて架けられた名物橋で、兩岸は武装した兵士に守られている。ソーラーと風力発電設備を備えた彼等の宿舎からみて多分20～30人位の番兵が駐在しているのではないと思われる。

八宿県の行政府のある白馬鎮(村)は共産党の本部や軍隊の駐屯地でもあり、人口は少ないが小奇麗な町だ。天井をねずみが走り回るトタン屋根のホテルでは、昼間から役人や軍



人が麻雀やトランプで賭けに興じている。いくら自治区でも中央政府が知ったらどんな顔をするだろう?。練炭を割って沸かしたボイラーのちょぼちょぼ水で体を洗い、夕食には気張って一番高い白酒“五粮液”を注文したが、匂いをかいていた鳥里さんが突然偽物だと叫びだし、宿の亭主としばし口論。結局鳥里さんの眼力が勝ち亭主は降参。十分の一以下の安いものと交換したが、われわれの口にはどれも同じ味とは情けない。

朝おきると、鳥里さんが頭を抱えている。何と彼のお母さんが昨晚亡くなった由。合掌。ここに改めてお悔やみ申し上げます。昨年は、‘最後の香格里拉(四川省甘孜藏族自治州)’に行っている時、私も父の死に目に会えず同じ経験をしたので、彼の気持ちが手にとるようにわかり、なんとも慰めようも無かった。衆議の結果、昨日通った空港から成都行きが週4便あるとのことなので彼にはすぐに成都に戻ってもらうことになった。

彼の留守中、我々だけで先に進むことも考えたが、許可書の条件によればいろいろ思うように運ばないことがわかり、我々はここでしばらく休養することにする。ホテルの向こう側には、軍の駐屯地とロバの飼育場があり、そのロバが抜け出し町の中を闊歩している。中には路上で求愛行為をしている奴もおり、いたっておっとりした町だ。退屈しのぎにぶらぶらしていると小学校があったので門の中に入ると子供たちがハローと叫びながら駆け寄ってくる。午後4時ごろなのに、キャベツの炒め物をご飯の載せただけのボールを持っている。日曜日なのになんでこんなに生徒が多いのかいぶかったが、ここには通学できない遠隔地の子供用に宿舎があるようだ。そ



5000 mの峠を走り抜ける我等がランクル

して我先にマイネーム……と自己紹介してくれる。彼らの英語もそこまでなので暇つぶしに、にわか英語レッスンを始めるとみな熱心に耳を傾けてくれた。学校のすこし先にTV修理屋があり、その主人が英語で話しかけてきた。彼は成都の大学で学んだ後、軍隊で修理技術を習得した由。日本人に会ったのは初めてだそうだが、使用している日本製の半導体部品を通じて日本に親しみを感じているようだ。人のいい彼は別れ際に、故郷から送ってきた大袋のお茶を2袋もくれ、機会があれば彼の故郷雅安の実家にぜひ来てくれと好意的な好青年だ。

チベット人の子供は、おもちゃを買ってもらえないので、手製の木のローラースケートの上に腹ばいになり坂道を転がり降りていた。町のはずれの谷川を覗くと、斜面は何とゴミの山ではないか。県政地だけあって町の中だけはきれいに装っているが、一步裏側に入ると、凶らずも昼間から賭け事に夢中の役人の腐敗行政を垣間見る。

鳥里さんが軍用車で空港からもどると、早速ランクルに乗り換え、然鳥に向かって駆ける。念青唐古拉山脈の東端の雪峰を見ながら谷をつめ然鳥峠に出ると、目の前にガンリガルボの山々、東側には伯拉嶺山脈の一角が疲れた目を癒してくれる。然鳥は湖の周りをぐるりと雪山に囲まれまさに圧巻だ。将来第一級の観光地となるのは疑いも無い。ここからは、川蔵公路と分かれてミャンマーの国境に近い察隅方面へのがたがた道に入る。途中の部落から川原の中のトレイルに乗り入れるが、湿地帯の通過には轍にはまり閉口する。ここを抜け出し、再び山道を進み、どんづまりが今日の目的地である拉(来)古村だ。正面には夕暮れの中に逆光の拉古氷河がかすかに見える。この村には宿泊設備は無く、民宿かテントの選択しかない。幸い近くにいた村長が民宿を快く引き受けてくれ、彼の家族の一員となる。彼の家族は、母親、奥さん、小学校一年生くらいの男の子、村長の妹と弟の6人構成だ。部屋は、居間兼寝室の1つしかなく、その片隅に我々の寝場所を提供してくれた。早速バター茶を振舞われ、夕食は特別に村長が作ってくれた米飯とキャベツの炒め物だ。家族はツアンバ(麦焦がしのようなもの)とバター茶だけで申し訳ない。

夕食が済むと、近所の青少年が10人位集まり、1つしかない裸電球の下で読書の自習をはじめた。われわれにはとても見えそうもない薄暗い中での努力には脱帽する。教師もやって来たが中国語はまったく駄目。昔教師をしていた村長がかりうじて中国語を理解できたので、鳥里さんのチベット語と補完しあい何とか意思を伝える。

夜半にトイレに行こうとドアを開けるとなんとヤクが横たわって通せんぼをしているではないか。どうしようか思案している内に、だんだん我慢の限界に近くなったので、恐る恐るヤクの背中を軽く蹴るとかりうじて通れるスペースを空けてくれた。皆さんこの切羽詰ったときの気持わかりますか？

ツアンバとバター茶の朝食の後、村長が昼食用に焼いてくれたチャパティーみたいなものを持って快晴の中を拉古氷河へ向かって馬上の人となる。氷河からの冷たい清流を渡り山道の登りにかかると一番太ったNさんがバランスを失って落馬。彼はこれに懲りて以後ずっと徒歩で頑張る。馬上では、樹間を通る時、枝で顔をたたかれないよう注意していたが、一



6,124の無名峰(拉古氷河)



氷河湖を囲む山々

寸油断した隙に縦の木のトゲトゲしい枝にやられ、枝先が目に入ってしまった。痛いなの。目薬で流しだそうと試みたが全く効果なし。それ以降痛さをこらえ片目で進むと目の前がパッと開け2つの氷河の間のモレーン(というより河原みたいな所)に出る。モレーンの上に出るとようやく氷河と対面。こんな機会を逃さじと、目の痛さも何のその、6,000米級の白峰群に向かって夢中でシャッターを押し続ける。

ここから先に進むには、装備不足なので、ここで村に向かって踵を返す。夕食は、炒めたジャガイモの千切りと米飯の特別食。鳥里さんは我慢しかねてとうとうカップラーメンを出した。シュラフの中では、目からゴミを出そうと勝手に涙が流れ出て安眠出来ず。昨日の朝食の様子を見て、今日はおかゆを作ってくれた。これに永谷園ののり茶漬をかけると滅法美味い。

作業場の屋上で家族全員と記念写真を撮った後、後ろ髪を引かれる想いの我々を非情にもジープは再び然鳥へと拉致して行く。然鳥から再び川蔵公路の砂利道に戻り、時折見えるガンリガルボ山群や念青唐古拉山脈の景観にカメラストップを繰り返して乍らアルプスの様に美しいといわれる波蜜の町に入る。

運良く、この県最大の病院があったので、時間は過ぎていたが、急患として目を診てもらう。当直医は大事を取って、すでに帰宅後の眼科医を呼び出してくれた。傷の痛さは変わらないが、異物はすでに目外に排出されていると聞いて一安心。3日分4種類の薬と診察代すべてで18元。その晩安堵してか白酒のピッチがあがる。もっとも拉古村以外では毎晩のことだが。

ああ、疲れた。なんか体が揺れているじゃない？ 栄養不足だからかなあ？ ～お風呂から出た私は、自分の体調を心配していた。初めて来日してから、半月ぐらい経った時だった。

日本に来る前に、日本の物価は高いから、栄養をしっかりと取らないと体をこわすかもと知り合いの日本人に注意された。もらえる奨学金があまりに少なく、質素な生活にも慣れてきた私は、お金の使い方にできる限り気を配りながら、まったく新しい環境に早く馴染むようにしてきた。でも、半月とはいっても、まだまだ分からないことばかりだった。知り合いが紹介してくれた、中国語が完璧な日本人の家(10階建てのマンションの9階にある)にホームステイさせてもらって、家賃がだいぶ安かったから、本当に助かった。でも、彼女は放送局のプロデューサーだから、あまり家にいないし、日本の状況を教えてくれる時間もほとんどなかった。知らないうちにストレスがだんだん溜まってきてしまった。私にとって新鮮かつ不思議な満員電車のおかげで、夜、家に帰ると、床に体を横にして、動きたくなくなる毎日だった。中国ではで炭水化合物をあまり摂取しなかったけど、一人ぼっちの異国で倒れない為にそれをどんどんお腹に入れてしまった。そのせいか、体重が案外速いスピードで増えてしまった。いけないと思いながら、来日まで続けてきた太極拳も適当な場所が見つからなかったから、全然練習しなかった。

今日も疲れたから具合が悪いのだろう。と思いきや、目を本棚に移してみると、何と本棚も揺れている。おかしい！ テレビも揺れている。床も…なに？ 地震か?! うそ！ ああ、どうしよう？

ずっと中国の内陸で暮らしてきたから、「地震」というのは言葉として知っているだけ、一回も遇ったことがないし、その意識は全然なかった。関東大震災や阪神大地震などを聞いた時、地震の破壊力にびっくりした。でも今、確かに地震？ 大家さんは出勤中。今どんな対策を採ればいい？ 隣の家はどうするだろう？ ベランダに駆けてみたら、近隣の家も、近くのマンションも、みんな日ごろと同じだ。どうして？ まだ揺れているじゃない？ もう部屋の中に入りたくなく、ベランダの手すりをしっかり握り、目を丸くして、揺れている本棚を睨んでいた。慌てているうちに3、4分ほど経過して揺れがやっと静まった。足がまだ震えているけど、10分ほど経つと、気分がやっと落ち着いた。「地震」という言葉が頭の中に浮かんでき

た瞬間は本当に怖かった。

次の日に、クラスメートに聞いてみて、地震だと確かめたが、彼らの冷静さにも感心した。さすがに長年日本に住んでいて、よくある弱震には慣れているし、万が一大きな地震が起きた場合の対策も知っているのだろう。その場で、地震発生時の対応策、及び日ごろの予防策をいろいろと教えてもらった。私もその日、帰る途中で、懐中電灯や水やビスケットなど最低限の予備品を買ってきた。

その後、感じられる弱震がまた何度あったが、当初の緊張感が緩くなってきた10月23日、日本の地震史に記載される、新潟県中越地区で強地震が発生した。その日、大家さんと地震の避難策の話をしなが、夕飯を終えたところ、突然、9階にある部屋全体が揺れ始め、本棚もがたがたと倒れそうになった。経験のある彼女はすぐにテレビのスイッチを入れて、チャンネルを回し始めた。「おかしい、何でまだ報道していないの、遅いなあ」、いつも私に中国語でしゃべる彼女は日本語で文句を言いながら、チャンネルを回した。震源地は新潟県、震度は6級強だ、2分ほど後に、テレビからたくさんの情報が流された。でも、揺れはまだ続いている。彼女も慌てているようで、ちょっと片付けたほうがいいと私に言い出した。最悪、と思いつつ、準備してある避難用品を全部リュックに入れ、様子を見ていた。結局、住んでいるところは3強ぐらいの震度でとどまった。その後の番組はほとんど新潟県の状況に注目しているし、日本全国もそこに関心を払っていた。

「地震は怖いよ、でも、しかたがない」、ある日本人に尋ねてみたら、このように答えた。どの国でも、経験があるか否かにかかわらず、人間はみんな同じだ、思いがけない災害の前に弱いものだ、と実感してしまった。2003年中国を始めとしたSRAS、鶏インフルエンザ、2004年来日してから何回の巨大台風、新潟大地震、年末インドネシアの地震による史上稀な津波などなど、天災が絶えず人類の命を奪っている。

今、天災の多い国に住んで生命の不安感を切実なものとして感じている。しかし、災害に出会った多くの人々は助け合って立ち直ろうと努力している。国際的な人道援助が求められている中で、世界には戦争の砲煙はいまだに消えていない。

私たちは、自分の為に、自分の家族、友人などの為に、「平和は何よりだ」という考え方をもち、それに向けて頑張りたい、とここで声を大にして言いたい。

今年は酉の年です。鶏は、人類がもっとも早く飼いな  
らした「六禽」の一つです。

伝説によりますと、遠い昔、南東の方向に、桃都とい  
う山があったそうです。そして山にはとても大きな木  
があり、その枝は1.5キロメートルにも広がり、枝の上  
には「天鶏」が住んでいたというのです。毎日太陽が昇  
ると、天鶏は鳴き始め、天下の鶏も一斉に鳴きます。人  
間は鶏の鳴き声を聞くと直ぐに起きて、一日の仕事を  
始めます。唐の大詩人、李白の詩には「半壁見海日、空  
中間天鶏」と言うような句があります。

また、鶏は「五徳」を持っていると古人に思われてい  
ます。

- 1.「文徳」：鶏頭の美しい鶏冠は、科挙に合格した昔の文  
官の帽子のようなので、教養があるだと思われてい  
ます。
- 2.「武徳」：鶏の足の後ろに、鋭い爪があり、「麟角鳳距」  
(麒麟の角、鳳凰の爪)とも言われるように、威風堂々  
としていますが、めったにこの爪で相手を傷つけはし  
ません。

3.「勇徳」：鶏は勇敢で頑強な性格を持ち、二匹の鶏が戦  
うとき、どんなに血を流し、羽毛を飛び散らしても、  
簡単に負けはしません。

4.「仁徳」：雄の鶏は、餌を見つけると、それが僅かなも  
のであっても、いつも大きな声で、仲間たちを呼び、  
先に仲間に食べさせます。

5.「信徳」：鶏は一年中、一日も弛まず、暁を正確に告げ  
ます。時計のなかった遠い昔、鶏のこの信頼できる美  
徳は人間にとってどれほど有り難かったことでは  
う。

今年、十二支の中で唯一の禽類である、「鶏」に当  
たります。“是非、人びとが良い年を過ごせるように見  
守って欲しい”と誰もが願っていることでしょう。。。。。

何媛媛：本名、何向真。

山西省出身。山西大学で日本語及び日本文学を専攻し、卒  
業。一昨年来日して以来、地域の国際交流活動に力を入れ、  
古筝と中国語を教えています。

町田市能ヶ谷町在住。Tel. 042-735-3984  
Email:kakoushinjp@yahoo.co.jp  
Web site:http://www.cn-jp.com

## ネパールスタディツアー (6) 『ホスピスでのくらしーその2』

岩田温子

ホスピスに住む女性たちは特別な理由がなければ自由に  
外へでかけることができません。

特別な理由と言うのは、親の家を訪ねるとか、重い病気に  
なって検査や治療のために大きな病院へ行くなどです。外  
部の人間がホスピスを訪問するのも厳しく制限をされてい  
ます。まさに籠の鳥の状態です。カトマンズの本部からも、  
700キロも離れていることもあり、滅多に人が訪れることは  
ないそうです。これを聞いたとき、たとえ衣食住の心配はな  
くても、狭い空間の中で、毎日合わせる顔が同じ、目に映る光  
景も同じというのは、精神的に相当な苦痛だろうなと想像し、  
胸の締め付けられる思いがしました。時々、脱走を試みる人  
も出るそうです。しかし、戻る家がなく、教育はなく、手に技  
もなく、様々な病気を持っていることも多い女性たちが外へ  
出て、自立した暮らしをすることはまず不可能です。もし外  
へ出たとしても、恐らく行く先は再び身を売る暮らししか  
ないでしょう。閉じ込められていると言ってもよい暮らしも、致  
し方ないことなのかと思いました。

そういう日々をすごしている女性たちにとって年2回、3  
月と8月に、スタディツアーのメンバーが訪問することは、  
大きな楽しみと喜びのようであり、一種の家族再会のような  
温かみのある雰囲気さえも感じられました。カカルピッタに  
滞在中の一日は彼女たちと一緒に外で過ごしました。私た  
ちが滞在しているホテルで昼食を取り、映画を見て、その後  
ショッピングを楽しむという計画です。朝、バスを仕立てて  
迎えに行くと、全員が精一杯のおしゃれをして、待ちきれ  
ない様子でいました。ホテルでの昼食にはネパール風餃子、ピ  
ラフ、焼きそば、数種の揚げ物、デザートのお菓子など、  
普段は口に出来ないものを用意しました。彼女たちの食事は

一日二回、基本的にはネパールの庶民の食事である、ご飯に  
豆のスープ、野菜のカレーという内容です。野菜の中身が時  
に変わる程度で、365日ほぼ同じものを食べています。この  
外に、HIV感染をしている人たちには、体力が落ちないよう  
に、毎日卵を1個と週1～2回の鶏肉料理が追加されていま  
す。彼女たちはおしゃべりもそこそこに、よく食べてくれま  
した。食後はバスで隣町の映画館へゆき、2階の特等席を陣取  
り、お菓子を食べながら、歌と踊りとアクション満載のネパ  
ール映画を見ました。途中休憩を挟んで、3時間以上の上映時  
間、つかの間の夢の世界に浸るように身じろぎもせずに画面  
を見ている姿が印象的でした。その後は、またカカルピッタ  
の町へ戻り、それぞれに服をプレゼントするために布地店へ  
でかけました。普段、彼女たちの衣服はスタッフから支給さ  
れるので、自分で好みのものを選ぶという楽しみはありません。  
店主に幾種類もの生地を出してもらい、皆でおしゃべり  
をしながら好きなものを選んでもらいました。

ホスピスの女性が何かの理由で町へ出かけると、往々にし  
てすれ違う人から「インド帰り」とか「エイズ」といった心無い  
言葉を浴びせられ、心を傷つけられるそうです。この日一日  
は私たちが保護者の役目をし、彼女たちには心から楽しんで  
もらえたのではないかと思います。スタディツアーの回を  
重ねることによって、ホテルや映画館、布地店の協力を得ら  
れるようになってきたのです。もちろん、ラリグラスが落とす  
お金の力というのも、小さな町の経営者にとっては無視でき  
ないことでしょう。それでも、ホスピスの女性を外へ連れ出  
すことで、彼女たちを喜ばせ、同時に町の人たちの偏見を少  
しずつでも減らせて行けるなら嬉しいことだと思いました。

横浜を出航して10日余。神戸からも300名くらい乗船し、乗船客は全員で981名。生後10ヶ月から90歳代(3名)まで幅広い年齢層だ。上海、ダナンと寄港し、現在、船はシンガポールへと向かっている。

一日の生活パターンもほぼ定着してきた。朝、6:00起床。9階(最上階9デッキでラジオ体操、太極拳。何10年ぶりのラジオ体操だがなぜか第1、第2とも忘れていなかった。太極拳はまだ見よう見まねだが、四方水平線に囲まれた中で体を動かすのは気持ちよいものだ。

体を動かした後は、8階のレストラン“ヨットクラブ”で朝食(コーヒー、パン、チーズ、ヨーグルト)。この船のメインレストランは“トパーズルーム”といい、4階に位置している。そこでは朝食には和食も用意されている。8階で軽く朝食をとると私は4階に移動し、味噌汁と生野菜と果物を食べる。つまり、朝食のハシゴをするのだ。

食後は、レストラン前に置いてあるピースボート新聞“四つ葉”(毎日発行)を一部もらって自分のキャビンに戻る。新聞にはその日の催し物の一覧が載っている。興味あるところに参加する。何もせずボーッとするはずがついあちこち首を突っ込んでしまう。絵手紙とコーラスの講座にはもう3回も参加してしまった。

それぞれの講座はピースボート乗船者が自分の特技を生かして自主企画し、‘この指とまれ’方式で行われている。又、“水先案内人”と呼ばれるジャーナリスト、ミュージシャン、作家、NGO活動家etcを招いての講座も2～3日に1回くらいの割合で開かれている。

この10日間では、こども達に戦争について1000回以上も話しをしている本多立太郎さんの話を聞いた。話の内容は勿論だが、91歳という年齢とは思えない情熱と若さには感激した。30歳年下の私は全くだらしがないというしかない。他にも、中国NGO研究家の王名さん、マレーシアの人権活動家であるチャンドラ・ムザファーサンたちの興味深い話を聞くことができた。これから先の寄港地から乗船してくる水先案内人には高遠菜穂子さんや森達也さんがいるので非常に楽しみにしている。

昼食をはさんでそんな講座に参加したり、キャビンに戻って昼寝をしたり、デッキで手紙を書いたりしているとたちまち夕食の時間になる。夕食は、4階のメインレストランで食べる人が多いからか前半、後半に分かれる。私は後半で、19:30～のグループだ。飛鳥などの豪華客船とは違うから、ジーンズ、スニーカーでもOKだ。フォーマルディナーは105日間のうち数回だけというから気楽である。乗船3日目に船長主催の歓迎ディナーがあったが、女性はワンピース、男性は上着にネクタイ程度でよかった。イブニングドレスにタキシードという世界でないことは助かる。毎夜、シアターでは日替わりで映画が上映されている。

私はまだ見てないが…。8階のレストラン“ヨットクラブ”が20:30から居酒屋“波へい”になる。私はまだ1度しか顔を出していないが、日本酒も何種類かあって格安でなかなかいいところだ。だいたいこれで一日が終わる。時差が生じる日は午前0時に1時間進ませたり遅らせたりする。

洗濯は部屋に常備したある大きな布袋(60X40cm)に入るだけ詰め込んで枚数を伝票に記入しサインして置いておく。部屋係りの人が持って行って2日後にクリーニングされて戻ってくる。1袋600円。コインランドリーもあるがむしろ割高になるので、下着類だけはシャワーを浴びる時に手洗いし、それ以外のTシャツやジーンズはクリーニングに出してしまう。

この船、トパーズはパナマ船籍で、総トン数31,500トン。進水したのが50年前前というからかなり古い船といえるだろう。その間に何回か名前を変えて現在はトパーズという。他の客船に乗ったことがないので比較はできないが、キャビンのシャワー、トイレ、洗面台、クローゼットなど、必ずしも使い勝手がよいとはいえない。でも慣れてしまえばこんなものかと思えてくる。

予想外だったのがインターネットの接続がスムーズに行かないことだ。6階のレセプションでパソコンのキーとマウスを借り、7階のパソコンが数台置いてあるブースまで行ってやるのだが、それがなかなか接続しない。通信衛星を使った無線ネットワーク接続とかで、スピードが遅くつながりにくいのだそう。30分1,000円、これはレセプションでマウスを借り出した時点から返却までの時間がカウントされる。階段を駆け上がり、パソコンとマウスをつなぎ、アドレスを打ち込み、さて文章をなんて考えている間にすぐに1時間くらいは過ぎてしまう。その上原因不明のトラブルで不通なんて…。「あ～あ!ビール5杯分が消えた～」なんてつい愚痴ってしまう。レセプションの人も「寄港地のインターネットカフェでやった方が確実ですよ」という。しかたがない、せつせと手紙を書いて投函することにしよう。届くまでに日数がかかっても仕方がないだろう。

健康状態良好。知人に教えてもらった市販薬アネロンと病院で処方してもらったポララミンが効いているからかひどい船酔いになることはなく、食事も1日3食きちんと食べている。この調子で行けば、105日何とか乗り切れるだろう。診療室が私のキャビンの並びにあるというのも便利(?)だ。あまり世話になりたくはないが…。ドクター2人(1人は日本人)と看護師1人がいる。

船は明日、シンガポール入港。その日の夜半には出航するから10数時間しか停まらない。そこで投函しようと思う。  
(2005年2月13日)

**P.S.** 上海までは真冬の寒さだったのにもうすっかり夏。キャビン内も暖房から冷房に切り替わった。

■ラオス モン族の村で図書館をつくる

今年9月から、ラオスのシェンクワン県ノンハート郡の小さな山間の村で子ども図書館の建設が始まり、ぼくも参加します。

前号でお話した、ラオスのバンビエンにある桑畑有機農場で素敵な日本人(?)に出会いました。安井清子さんと言います。ラオスから逃げてきたモン族の難民キャンプ(タイのバンピナイ)でNGOの職員として子ども図書館の運営を6年続け、その後もラオスでモン族の民話を記録・出版などの活動を続けモン族の人々と深く関わっている人です。時には、東チモール、アフガンでもトルストイ原作の絵本「おおきなかぶ」を読み聞かせて(引っ張って?)子どもと絵本の世界を繋げる活動をしています。その安井さんが中心となって絵本を集め、基本計画案を作成するなど、小さな子ども図書館を具体化する作業をしています。

■ラオスから東チベットへ

安井さんと日本で再会した時に「絵本をかついで、東チベットの小学校まで来てくれない?」というようなことを言いました。実際に安井さんが、ラオスから東チベット理塘県曲登郷のゲーサンメド小学校(‘わりい’99号)を訪問したのは、2004年の9月初旬のこと。

小学校建設は石積み工事も終わり、内装工事も大詰めに迎えているところで学校は新入生が集まり始め、にぎやかな時でした。土曜日、小学校の先生に授業を調整して絵本のお話しと遊びの時間を作ってもらいました。一教室に80名あまりも詰め込まれ、大変な熱気でした。安井さんは前夜に曲登出身の先生に言葉を習い、簡単な言葉と掛け声で子どもたちに読み聞かせるのは、職人芸のようでした。子どもたちは身体を熱くお話しに聞き入り目を輝かします。曲登ゲーサンメド小では、「おおきなかぶ」を引っ張る真似がしばらく流行っていました。ぼくも、時折せがまれて、安井さんからもらった絵本でその真似事をしましたが、なかなかうまくはいかないので、結局は子どもたちが替わり番こに読み聞かせあうようにしました。その本には簡単な中国語訳をつけました。

■東チベットからラオスへ

安井さんの小学校訪問の後、ぼくもビザの書き換えのために安井さんと一緒に一度ラオスへ出国しました。ぼくのラオス訪問にはもうひとつ目的がありました。日本で再会した際に、「いつかモン族の村で図書館を建てたいから、協力してほしい」と伝えられており、それが、ぼくが東チベットの彼の地で石を積んでいる間に、話が具体化して行き、一緒に村ま

で行こうと誘いを受けました。四川省から雲南省を長距離バスで駆け抜けラオスに辿り着いたのは9月の中旬でした。

■ラオス モン族の村で図書館をつくる

安井さんから図書館建設の想いを打ち明けられ、現実性を感じた村の長老たちが決めた場所で、今回の訪問は敷地測量を行ないました。それはとても簡単なもので、敷地裏の家から薪を借りて来て、先を削り尖らせて敷地の外周に杭を打つ。



安井さんの読み聞かせに聞き入るチベットの子ども達



図書館の予定地で絵本の読み聞かせをする安井さん

それを街で買ってきた黄色いビニールの紐で繋いで敷地を三角形で分割する。そして各辺をメジャーで図る。

どうやらそれが村の人の目には、大げさなものに映ったらしく、「図書館はもうできるのかい?」と訊かれたり、「家の北側に新しく家を建てる場合は、その家の神棚を避けて建たないといけないよ」とか、「モンの家は扉がある位置が決まっている。でもモンの家には窓が少ないから、多いほうがいいなあ」とか、敷地にいるだけで通りかかる人が言ってくれる。

敷地の測量が終わっても、敷地の外形の紐はそのままにしておきました。その紐の領域で絵本が読まれたり、子どもが何かを期待して集まったりと空の敷地が、もう「絵本とお話を楽しむ空間」になってしまいました。子どもたちも、いつの間にか「パヌン家(パヌンはお爺さんにもらった

安井さんのモン族名)は、いつできるの?」と言います。

「図書館建設」は、絵本を楽しみその世界に触れて、村の人たちが自分たちで運営できるように人材を育てるという「図書館活動」と同時に進めるということと思いました。

■「語り」の民族の図書館?

その後、村の長老たちとも話し合いました。どうやらラオス、特に文字媒体の乏しいモン族の村では「図書館」と言っても皆ピンと来ないのです。絵本や文字に触れ、子どもたちが絵を描いたり、勉強できるスペースでありながら、時にはお爺さんお婆さんによるモン族の歴史、伝統を伝える民話が聞かせられ、村の人々が話しあったりできる「みんなの家」のような物を想像しました。

今回の訪問で、「空」の敷地が活動の中心の場所を覆う「殻」になりつつあると感じます。3月から建設のための調査とワークショップに行って来ます。(2005年2月20日)

●安井さんの活動に関しては、「ラオス 素敵な笑顔」(NTT出版)「空の民の子どもたち」(社会評論社)「チューの夢 トゥーの夢」(福音館書店)に詳しい。モン族の衣装・生活を知るには「たぐさんのふしぎ2004年11月号わたしのスカート」(福音館書店)がある。



谷崎潤一郎に関しては西洋崇拜、転じて日本(主に関西)の伝統文化への傾斜という認識しかなかった。日中戦争以前に二回も中国へ渡り、文化的刺激を受けているとは知らなんだ。言い訳をすれば、谷崎が中国について書いたものをまとめた一冊がこれまでなかった。死後39年経ってから、初めて刊行された本書がそれ。

一回目の中国訪問は観光にとどまっている。その様子を書いた紀行文は、さすがに鋭い人物描写がなされていて面白いが物足りない。1926年に再び訪れた上海では中国文学を担う青年たちと交流している。表層的な「お付き合い」からは見えなかったことが谷崎の筆を熱くする。その5年後には満州事変が待っているのだけれど。

当時中国で新知識を得るには、日本語の書物を読むことが一番手っ取り早かつたらしい。西洋の書物も日本語からの重訳多かったとか。だからこそ谷崎に会い、文学者たちは興奮し歓迎する。彼らは租借地がのさばる自国を嘆いて言う。「われわれの国では外国人が勝手にやって来

て、われわれの利益も習慣も無視して、彼等自ら此の国の地面に都会を作り、工場を建てるんです。そうしてわれわれはそれを見ながら、どうすることも出来ないで踏み躪られて行くんです。此のわれわれの絶望的な、自滅するのをじーいっと待ってゐるような心持は、決して単なる政治問題や経済問題ではありません。」「われわれ文士は金を出すことは出来ないけれども、此のわれわれの悶々の情を、詩に歌い、小説に現はし、芸術の力で世界ぢゅうの人間に訴えようと思ふのです。」

この熱烈歓迎は谷崎に忘れがたい思い出として残る。1942年「文藝春秋」で発表した「きのふけふ」で彼はしみじみと中国で出会った文士たちのことを偲び、気にかけて述べる。「私が相識った彼の国の人達の中には、さまざまな思想傾向の人々が交わってゐたことであらうけれども、人間的には皆親しみを持つことが出来るやうな気がする。それはお互いにいろいろ違ったところはあるが、要するに同じ血が通う兄弟だからである。そして、今こそ余儀なく交際を絶ってはゐるが、将来又もとの親密さに戻れるやふに思はれる」。アブノーマルな恋愛観が印象に残る作家ではあったが、戦時中に書かれたこの文は常識的で冷静さそのものである。

(真仲智子)



## 春節オメデトウ!!

— 2005年度‘わんりい’の新年会 —

恒例、‘わんりい’のシュワンヤンロウの新年会が、麻生市民館料理室で1月30日(日)に催されました。定員(40名)いっぱい参加者たちは、ふくふく、ほかほか心も体も温かく、勿論お腹もいっぱい。10kgのお肉を平らげ、煮詰まったスープをくぐらせたおうどんの美味しいこと。参加の会員の顔ぶれは変わっても、京劇俳優・殷秋瑞さん直伝のタシの味付けは変わらず、中国人にさえ故郷を出て以来の本場の味と好評。



‘わんりい’紙上で馴染みになった何媛媛さんの中国琴の演奏を聴き、「中国語で歌う会」の発表も兼ね、趙鳳英先生指導で「康定情歌」を歌い、最後のお楽しみはビンゴとお笑い福引。‘お名残を惜しみながら、来春のシュワンヤンロウに期待して解散。

会を始めるにあたって、ご挨拶された佐々木さんの提案で、昨年末のインド洋大津波で被災された方々の霊に参加者一同で黙祷を捧げたことを付け加えるとともに、集うことのできる幸せを心から感じたことでした。(今川郁子)

## 内モンゴル植樹の旅のお誘い - チ・ブルグッドさんと一緒に植える1000本の苗木!

「馬頭琴演奏会」での収益金及び会場カンパと地元民の協力もあり、合わせまして、内モンゴル東部西ウジムチン地方に1000本の苗木を植樹いたします。現地は、春まだきの4月中旬ですが、苗木の活着の為にこの季節をはずせません。

自分たちの手植えの苗木が、内モンゴルで立派な森になる姿を思い描く喜びや現地村民の方たちとの交流、汽

車の旅、ツアーでは行かない自然いっぱいの北京郊外の長城に登るなどなど観光旅行にはない内容です。

2005年4月8日(金)～15日(金)

総費用:165,000円(各自の保険代金及び土産物代は除く)

申込&問合せ:‘わんりい’事務局(1ページ掲載)

申込み最終締め切り:2005年3月25日(金)

※詳細は‘わんりい’事務局にお問い合わせください。

## 《'わんりい' 掲示板》

### スマトラ沖地震復興支援 『アジアの子供たち』 写真展

於：街かどギャラリー原町田4-6-8 町田中央通り商店街 ぽっぽ町田斜め前

～ 頑張ってます！ 元気いっぱいなアジアのこどもたちの姿 ～ 展示写真公募中！

'05年3月18日(金)～21日(祝)11:00～19:00(最終日16:00)

#### ●同時開催 **チャリティ絵画と工芸品の販売** 寄贈作品募集中！

油絵、水彩画、版画、工芸品など作家自ら当覧会のために寄贈くださった作品を一律3000円で販売します。サイズは大小いろいろあります。先着順に購入できます。売上金はスマトラ沖地震復興支援として寄贈されます。尚、街かどギャラリーでは、期間中に下記の催しを予定しています。



#### ●講演「津波被害地スリランカ東海岸を訪ねて」

3月20日(日) 14:00～16:00

講師：澁谷利雄(和光大学人間関係学部教授)

3月5日より10日間、今回のスマトラ沖地震でかなり被害の大きかったスリランカ東海岸を視察。LTTE支配の為被害の状況が分からない現地の実情のビデオ上映と報告

講師の横顔：スリランカ研究フォーラム主宰。文化人類学を専門とし、南アジア特にスリランカをフィールドとして、スリランカの言語(シンハラ語)、文化、歴史等に関する著書が多数ある。

#### ●講演「我が目で見たスマトラ沖地震災害」

3月21日(祝) 14:00～15:00

講師：バンバン・ルディアント(和光大学経済学部教授)

スマトラ沖地震災害発生後、JICA 専門家として、もっとも被害の大きかったスマトラ島アチェ州被害状況調査に3度訪れて目撃した被害の状況を自ら撮影のビデオ上映と報告 ※ビデオは随時会場で見ることができます。

講師の横顔：インドネシア出身。国連スタッフとして地域情報システム作りを担当。現在、和光大学で教鞭をとる傍ら、アジア防災センターと協力し、World Wide Web による防災情報発信システムデザイン「アジア地域防災情報ネットワークシステムの開発研究」プロジェクトを研究中。その他、インターネットビジネス開発援助、多文化交流など多彩なテーマに取り組んでいる。

#### ●馬頭琴演奏(予定)

3月21日(祝)13:00～13:30

演奏者：チ・ブルグッド

この展覧会は『はじめの一步、ボランティア活動のきっかけ』(3月21日(月)10:00～16:00 於：まちの駅・ぽっぽ町田/主催：はじめの一步、ボランティア活動のきっかけ実行委員会/共催：町田市社会福祉協議会)というお祭開催にあたって、当該実行委員会より、町田発国際ボランティア祭「夢広場」参加団体による国際協力団体連絡会('わんりい'もメンバーです)に協力の呼び掛けがあり実施されることになりました。ただ今、展示写真及びチャリティ寄贈作品を募集中です。

締め切り：3月15日

受付場所：町田国際交流センター(詳細の問合せ：Tel 042-722-4260)

#### ●パートナー文化サロン第29回 「中国琵琶の旅」

自然豊かなお寺の会場で、中国琵琶の華やかな音色を楽しんだり、中国琵琶についてのお話を伺います。

2005年3月27日(日) 14:00～16:30

夏菟山修廣寺本堂(麻生区片平/小田急柿生駅徒歩12分)

先着50名(申込制) 700円(一般)(当日受付にて)

主催：市民文化パートナーシップかわさき

申込と問合せ：044-221-8107(9:00～16:00 土日祝休)

#### ●パートナー文化サロン第30回

#### 「知れば知るほど面白い能の世界」

～お話・実演・体験～

2005年4月2日(土) 14:00～16:00

於：川崎市能楽堂(JR川崎駅徒歩7分)

先着140名申込制 500円(当日受付にて)

主催及び申込問合せ：市民文化パートナーシップ(上記)

中国旅行は、中国旅行専門店・アクロス中国へ

20年の実績と中国人スタッフと中国留学経験者があなた

と一緒に創る中国の旅 Tel 03-5352-0146

●3月の定例会：3月17日(木) 13:30～田井宅

おたより発送：3月28日(月) 14:00～田井宅

#### 蔣婷(ジャンティン) 琵琶リサイタル【祝福】

'05年4月9日(土) 14:00開演(13:30開場)

津田ホール(151-0051 渋谷区千駄ヶ谷1-18-24)

出演：ジャンティン 東京アーティストツウ合奏団

予定演目：祝福、天山之春、火祭りの夜、チャルダッシュ他

前売：S席5000円 A席4000円(全席指定)

当日：S席5500円 A席4500円

主催：スタジオ・ジャンティン

制作協力：中国音楽勉強会/ラサ企画/彩鳳会/Farm Doo

申込み&問合せ：ラサ企画：03-5748-3040

E-mail: lasanon@ab3.so-net.ne.jp

#### 京劇研究会大5回公演

東京の京劇「盗仙草」「双下山」「霸王別姫」

於：麻布区民センターホール(開場は全て開演30分前)

(地下鉄日比谷線・六本木下車徒歩6分)

2005年3月11日(金) 19:00

12日(土) 14:00及び19:00

13日(日) 14:00

前売：2000円(当日：2500円)

申込&問合せ：03-5237-9988(塩沢)